キズナエピソード

朝永 花織　2話

//ヴィジュアルノベル形式開始

//都立有羽・廊下

あの時の一件から、俺と花織は学校でも話すようになっていた。

クラスが隣同士のために合同授業で顔を合わす機会も多く、

俺達はすぐに仲良くなっていく。

実際、俺はクラスの女子よりも花織とのほうが話しやすかった。

花織も俺との会話を心地よく思っているらしく、

向こうからもよく話しかけられるようになった。。

//次ページ

そんなある日の放課後。

俺は新聞部の友達に頼まれてコピー機と奮闘し、

夕日が落ちた頃にようやく解放された。

さて帰るか、と廊下を歩いていたその時、

花織の姿を見つける。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［とびお］

「花織。今帰りか？」

［花織］

「あ、とびおくん。

そうだよー。とびおくんも？」

［とびお］

「まぁね。

新聞部の手伝いをしてたら、こんな時間だよ」

［花織］

「わ、一緒ー！

ウチは友達の代わりに保健委員のお仕事してたんだ」

［とびお］

「ははっ。ホント俺達、変なところで共通するな。

どうせなら一緒に帰るか？」

［花織］

「あ！　それなら、ちょっと寄り道しない？

気になるカフェを見つけたんだけど、

お一人様だと入る勇気がなくてさ」

［とびお］

「おっけー。じゃあ、そこに向かうか」

//暗転

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

//カフェ・店内

そうして俺達は、花織が気になると言っていた

カフェへとやって来た。

言うだけあって、おしゃれなカフェだった。

たしかに高校生が一人で入るには勇気がいるだろう。

その時の俺達も妙にドギマギしながら注文を済ませ

空いていた席へと腰を下ろしたのだった。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［とびお］

「いやぁ、俺普段こんなとこ来ないから、ちょっと緊張するな」

［花織］

「実は、ウチも。」

［花織］

「ここ、友達が彼氏とデートで来たらしいんだけど、

結構雰囲気いいって言ってて、気になってたんだー」

［とびお］

俺は「デート」という言葉に一瞬ドキっとしつつ

相槌を打ったが、

続いて花織の口から出てきたのは大きなため息だった。

［花織］

「でさ、その友達が保健委員の子なの。

保健委員の仕事の日でも平気でデートの予定入れちゃうから、

その度にウチが代理で保健委員なのよ……」

［花織］

「しかも聞いてよ！　その子だけじゃないの！

昨日は掃除当番の子がデートで、ウチが代わりに掃除。

別の日は美化委員の子がデート……」

［とびお］

「それはお疲れ様だな……。

断ったりしないのか？」

［花織］

「とびおくんだってわかるでしょ？

人付き合いの大切さと大変さってのがさ。

それに、頼まれると断れない性格なのよ、ウチは」

［とびお］

あー。それはなんかわかる。

俺が無言で頷いていると、

花織はぐでーっと机に突っ伏してしまう。

［花織］

「あーあ。でもウチだって一度くらいは

彼氏とデートだからって言ってサボりたいなぁ。

……はぁ、彼氏欲しい」

［とびお］

「欲しいなら、作ればいいだろ」

［花織］

「簡単に言ってくれるね～。

そんなにすぐにできたら、苦労しないっての」

［とびお］

「いや、花織ならすぐにできるだろ。

カワイイんだし」

［花織］

「へっ!?」

［とびお］

花織が素っ頓狂な声を上げて顔を真っ赤にした。

そこで俺はようやく、

キザなことを言ってしまった自分に気づく。

［とびお］

「いや、あの、その、今のはなんだ。

言葉の綾とかいうやつでな……」

［花織］

「あ、あはは。そうだよね。

ウチは他のみんなとは違って

どこにでもいるようなフツーの子だから……」

［とびお］

「そうか？　俺はそうは思わないけどな」

［花織］

「っ!?　……も、もう！

とびおくんったら、ウチをあんまりからかわないでよね」

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

花織は笑ってその場をごまかすと、

そそくさとカフェラテを飲んで話を無理やり終わらせた。

からかっているわけではなく本心からだったのだが、

俺もなんだかむず痒くなってしまい、「バレたか」と

おどけてみせていた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//2話END